

〔一〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。〔 〕内の表現は、直前の語の意味を表します。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

民族を境界線から考える見方は、隣接する集団間の関係をとらえるときだけにあてはまるわけではありません。それは文化人類学にとって大切な「比較」という手法とも関係しています。

人類学者は、ずっと自分たちとは異なる未知の文化に魅了されてきました。イギリスの人類学者マリノフスキ（一八八四―一九四二）は、ニューギニアのトロブリアンド諸島とその近くの島々で行われている「クラ」という贈与交換について綿密な調査をしました。

このクラは、それぞれの島のシユ長たちがカヌーの遠征隊を組織し、海を越えて宝物を贈り合う習慣です。このとき贈り物として相手に渡されるのが、赤い円盤状の貝の首飾りと白い貝を磨き上げた腕輪の二つ。

どちらの贈り物を相手に渡すかは、島と島の位置関係によって決まっています。たとえば、諸島の西側にある島では、北方の島の相手に首飾りを贈り、腕輪を受けとる。そして南方の島からは首飾りを受けとり、北方の島からもらった腕輪を渡す。こうして島々のあいだを首飾りは時計回りに、腕輪は反時計回りに動くように次々と贈られていきます。ほんと不思議ですよ。

首飾りも腕輪も、それほど実用性はなく、外部の人間にはそれ自体に価値があるようには思えないものです。それでも、島々の男たちはそのプレゼントの交換に熱狂し、命をかけて荒海へとカヌーを漕ぎ出します。

このクラを、遠い異質な世界の不思議な習慣だと感じるかもしれません。なぜそんなことをするのか理解不能だ、と。でも、よく考えてみてください。

日本では正月に、いまでも毎年一〇億枚以上の年賀状が全国を駆けめぐっています。メールやSNSの時代になって減ったとはいえ、多くの人が年末の忙しい時期にわざわざ専用の葉書を用意し、プリンターと格闘したり、メッセージを手書きしたりしながら、せつせと年賀状のやりとりをしています。何年も会っていない人にも「今年もよろしくお願いします」と書きますよね。

なぜそんなことを続けているのでしょうか？ ニューギニアの島々の人にその話をしたら、なんでそんなことをやっているんだ、と不思議がられるかもしれません。

私たち自身も外の人から見れば不思議なことをやっている。それでも、クラ交換のような習慣を一方的に異質で理解不能だと感じるのです。ここでも差異が「比較」

して支えてくれる共感のつながりは、喜びや満足感を得られる大切なものです。

一方で、輪郭が溶けるような経験は、あまりピンとこないかもしれません。他者と交わるなかでお互いが変化するようなつながり方です。こちらは「共鳴のつながり」と名づけておきましょう。それは共感の「いいね」とはだいぶ違って、自他の区別があいまいになり、「わたし」が他者との響き合いをとおして別の「わたし」へと生まれ変わっていくといったイメージです。

（中略）
共感も共鳴も、どちらも生きていくために必要なつながり方です。本書が考えてきた二つの「つながり」、そしてそこで生じる「はみだす」という動き。それらについて考えることは、私たちがいかにして差異にあふれた世界とともに生きていけばよいのか、その方法を身につける思考のトレーニングなのです。

どうすれば「わたし」や「わたしたち」がともによりよく生きることができるのか。そんな問いをこの本では考えてきました。最後に、もう一度この問いに立ち返っておこうと思います。

第2章でもふれたインゴルドは自著『ライズ』のなかで、^⑤「線」には、あらかじめ決まった始点と終点とを定規で結ぶような直線と、どこに行くか定まっていないフリーハンドの曲線との二種類がある、と言っています。

最初の直線は、目的を決めて、それに向かってまっすぐ進むような生き方に重なります。おそらく結果を重視する受験勉強やビジネスの世界などにあてはまるでしょう。試験に受からないと意味がない。ものが売れなければ仕方がない。受かるためには、売れるためにはどうしたらいいか。何があっても、その目標を効率的に達成したい。日々、そういう思いで生きている人は少なくないと思います。でもインゴルドに言わせれば、そこには落とし穴がある。

まず定められた目標以外のことを考えなくなる。ある種の思考停止に陥る危険性があります。何かを成し遂げるにはどうしたらいいか、という問いの立て方からは、なぜ私たちはそうしようとしているのか、というそもそもの問いが排除されています。でも、たとえ大学に合格できても、大学で何を学ぶのか、大学に行ったうえでどう生きていくのか、という大きな問いは残されたままです。

ビジネスの現場でも、そもそも何のために働いているのか、なぜそれを売りたいのか、その原点を問うことが重要なブレークスルー「問題解決」をもたらすことがあります。でも、その大切な問いはスルー「無視」されてしまう。

もうひとつの落とし穴は、目標に到達することだけを考えた場合、その過程でどのように動くかとか、どんな手段を使って目標を達成するのかなどが問われなくなる

をとおしてつくりだされていることにお気づきでしょうか？

最初からニューギニアの人びとと日本に暮らす人は違うという前^cティがあるの

で、クラのような一見不思議に見える習慣を彼らがもっている、と「ああ、やっぱり違うんだ」と思ってしまう。

日本とニューギニアのあいだに引かれた境界線に沿って「差異」が見つけたされ、その境界線の存在が再確認される。文化人類学も、かつてはこの差異の比較を利用して、西洋近代が人間の唯一のあるべき姿ではない、という批判の根拠にしています。

でも、いま文化人類学は、その「比較」の意味を別の角度からとらえようとしています。

日本とニューギニアがたんに違うというだけでなく、共通性をもつ人間の営みとしてとらえることもできる。近代化した社会でも、ニューギニアの人びとと同じように不思議な贈り物のやりとりをしている。かならずしも市場経済という近代の制度だけに覆われているわけではない。そこには人類に普遍的な何かが潜んでいるかもしれない。この「比較」は別の意味で、私たち自身の文化や社会のあり方を再考するきっかけとなるのです。

文化人類学が大切な手法としている「比較」には、二つの種類があります。ある集団と別の集団をその境界に沿って別のものとして差異を強調するような比較（日本とニューギニアはこんなに違う！ 近代社会と近代以前の社会には大きな溝がある！）と、その境界線の引き方や差異を疑うような比較（日本人とニューギニア人ってまったく違うと言えるのか？ 近代化しても変わらない普遍性があるのではないか？）です。

じつはこれこそが、それぞれの輪郭を強調するつながりと、輪郭が溶けるつながりという、この章の最初に述べた二つのつながりに対応しています。「わたしたち」と「かれら」の「つながり」を、それぞれの差異を強調する方向で比較するのか、別の境界線の引き方や境界線を越えて共有される側面に注目して比較するのか。

（中略）
自己と他者の差異を強調して^③輪郭を強化するようなつながりと、自己と他者の境界を越えて交わることで^④輪郭が溶け出すようなつながりがある。ここまで、この二つの「つながり」をもとに文化人類学の視点を説明してきました。

たとえばSNSで「いいね」をもらうと、自分が認められたようでうれしくなります。これは「わたし」の輪郭が強調されるような他者とのつながり方です。「共感のつながり」と言ってもいいでしょう。「わたし」の固有な輪郭を確かなものと

る点です。できれば最小限の努力やコスト（費用）で、最短の時間で目標を達成したい。そうすると、その過程に起きるすべてが余計なことになります。

インゴルドの言葉を借りれば、それは出発前からすでに決まった経路をたどるだけの旅のようなものです。旅のおもしろさは、予定どおり目的地にたどりつくことより、その過程でどんなおもしろい出来事と出会えるかにかかっているのに、直線の旅は、そのプロセスを全部、余計なものにしてしまう。

それに対して、フリーハンドの曲線はどうでしょうか？ インゴルドは、それを徒歩旅行にたとえています。歩いている人は、進むにつれて変化し続ける眺^dポウや、それと連動して動いていく道の行き先に注意を払う。その途中で起きることをちゃんと観察しながら進んでいる。だから偶然的出来事に会っても、それを楽しむ余裕がある。

その^⑥道^道に出会う予想外の出来事は、とりあえず時刻表どおりに電車に乗って、計画どおりの日程をこなすことばかり考えている人にとって、旅の邪魔だと感じられるでしょう。しかしインゴルドは、フリーハンドの線にこそ、人は生き生きとした生命の動きを感じられるはずだと言います。

X、私たちは日々、時間に追われ、与えられた仕事や予定をこなすことで精一杯です。ひとつの仕事や片付けたら、また別の仕事にとりかかる。そのあいだに周りをじっくり観察しながら進む余裕はありません。インゴルドの言葉は、そんな慌ただしい日常を過ごす私たちにも大切なことを思い出させてくれます。

（中略）
私たちは小さいときから好きなことを我慢してがんばりなさい、そうすればよい人生が送れる。そう言われ続けて大きくなりました。でも目標を達成したらそこで人生が終わるわけではない。目標の達成は通過点でしかありません。またそこから歩み続けなければならない。

大きな目標を達成することだけを目指して、それまでのあいだずっと周囲の変化や他者の姿に目をつぶって耳をふさぐ。そうやって「わたし」の変化を拒みながら足早に通り過ぎていくうちに、私たちは確実に「死」へと近づいています。

インゴルドも、フリーハンドの曲線のような人生だけがよりよく生きることだと言っているわけではありません。線には直線と曲線の二つがあるのに、私たちは知らないうちに直線的な歩みをしてしまいがち。だからこそ二つの歩み方があることを自覚できるかどうか。それが「よりよく生きる」ことにとって意味がある。たぶんそう考えているのではないかと思います。

（松村圭一郎著『はみだしの人類学 ともに生きる方法』より）

問1 太線部a～dと同じ漢字を含むものを、後のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 「**シユ**長」

- ア 評価に**シユ**観が入る。
イ 祖母に**シユ**芸を習う。
ウ へんやつくりを部**シユ**という。
エ 寒さに強くなるよう品**シユ**改良をする。

b 「**円**バン」

- ア 新聞の日曜**バン**を読む。
イ 作業の順**バン**を書き出す。
ウ 祖父が裁**バン**員に選ばれる。
エ トネル工事で地**バン**沈下がおきる。

c 「**前**テイ」

- ア 宿題を**テイ**出する。
イ 速度を**一テイ**に保つ。
ウ 論文の**テイ**裁を整える。
エ 休み時間に校**テイ**で遊ぶ。

d 「**眺**ボウ」

- ア 屈強な用心**ボウ**を雇い入れる。
イ **ボウ**備の手うすな所をねらう。
ウ その歌は**ボウ**郷の念をかき立てる。
エ 姉は**ボウ**易関係の仕事についている。

問4 次の説明のうち、傍線部②「いま文化人類学は、その『比較』の意味を別の角度からとらえようとしています」について説明したものです。空欄に入る適切な語を、それぞれ漢字二字で答えなさい。ただし、ア～ウは1ページの本文中から抜き出し、エは自分で考えて答えること。

文化人類学は、人間の諸文化を比較研究する学問である。かつては、対象となる文化の間にある（ア）に沿って各文化の（イ）を強調することが主であった。しかし現在では、（ア）や（イ）を絶対的なものとせず、むしろ各文化に（ウ）する法則性を見出す方向へと変化している。このような方向での比較は、自身の文化や社会のあり方を外からの目で、つまり（エ）的な目でとらえ直すことにもつながっているのである。

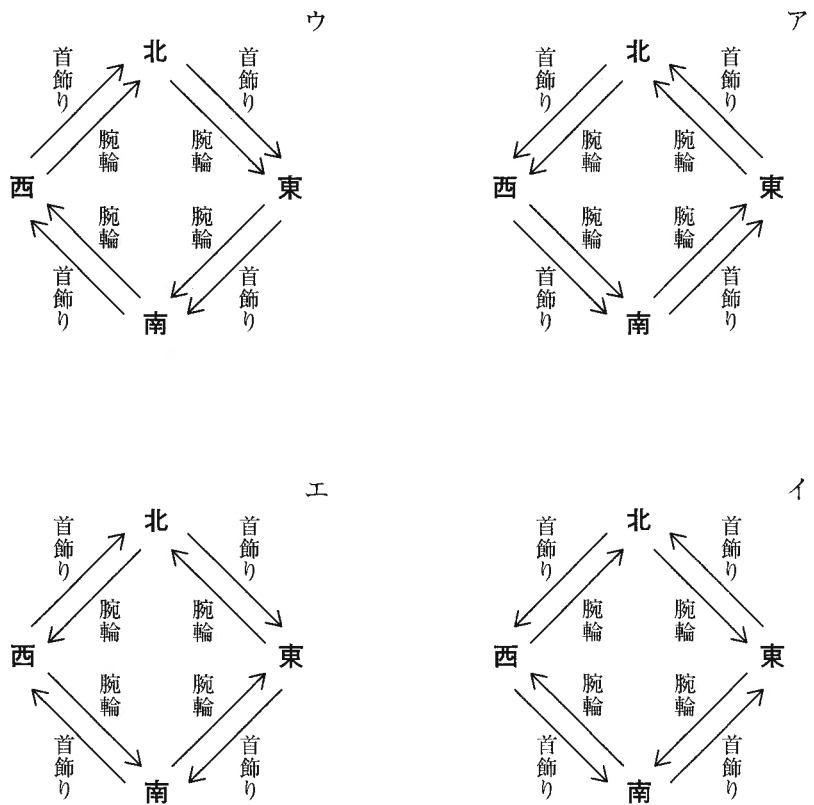
問5 次の説明のうち、傍線部③「輪郭を強化するようにつながり」について述べたものにはAを、傍線部④「輪郭が溶け出すようにつながり」について述べたものにはBを、どちらでもないものにはCを書きなさい。

- ア 会社の上司との垣根を越えて深い関係を築くために、上司に対して仕事にあえて友だち言葉を使って親近感を表現し、二人の間の心理的な距離を縮めようとするようにつながり。
イ 「正義のための戦争」の名のもと、自分たちの主義主張と合わない宗教や民族に結びつく人々をまとめて自分たちの敵とみなし、暴力的な行動へと駆り立てられていくようにつながり。
ウ オリンピックで日本代表選手が活躍すると、自分が成し遂げたわけでも、その選手と知り合いであるわけでもないのに、「日本人」として何だか誇らしい気持ちになるようにつながり。
エ 「外国人」「女性」「仏教徒」など相手の様々な側面と出会うことによって、相手が固有の「あなた」になっていき、「わたし」も「日本人」といった抽象的なくくりから抜け出すようにつながり。

問2 空欄Xに入る語として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア つまり イ とはいえ ウ たとえは
エ さらに オ そのため

問3 傍線部①「クラ」という贈与交換」を図式化したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。



問6 次の【資料1】は、傍線部⑤中の「直線」・「曲線」を生き方という観点で表にしたものです。また【資料2】は、本文を読んだ生徒四名（Aさん、Bさん、Cさん、Dさん）の感想です。これらを読み、後の問いに答えなさい。

【資料1】			
	「直線」的な生き方	メリット（利点）	デメリット（欠点）
「直線」的な生き方	(I)		
「曲線」的な生き方	(IV)		
	(V)		
	(VI)		

Aさん 志望校に合格することだけを考えて過ごしている私は、想定外の出来事を楽しむ余裕はありません。大切な問いを見落とすべきでないという筆者の考えは分かりますが、現実には、効率的に目標を達成することでしか満足は得られない気がします。

Bさん 受験勉強に励みながらも、うすうす感じてきたことをずばりと言い当てられた気がしました。確かに志望校には合格したいけれど、そのことに集中するあまり周りのことが見えなくなっただけだし、努力の過程にも大きな意味があるのだという筆者の考え方に説得力を感じました。

Cさん ⑤ 他者から求められることで自分が認められた喜びや満足を感じるつながりも大切だけれど、⑥ 他者と交わる中でお互いが変化するつながりも大切だという筆者の考え方は新鮮でした。⑦ さまざまに異なる傾向を持つ他者との共存が求められるこれからの時代に必要つながり方だと思いました。

Dさん 「いいね！」の数を競い合うような風潮に疑問を感じていた私は、そのような他者とのつながり方を否定してくれた筆者にとっても共感しました。みんなに同調して仲良くすることよりも、自分らしさを大切に生きていくことに賛成です。

(1) 【資料1】の空欄(Ⅰ)の要素を他の要素よりも重視している生徒を【資料2】から選び、A～Dの記号で答えなさい。

(2) 【資料1】の空欄(Ⅱ)と空欄(Ⅴ)の内容として当てはまらないものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

空欄(Ⅱ)

- ア 目標を達成すると無気力になりがちである。
- イ 自身の行動の原点や理由を見失ってしまう。
- ウ 自分が変化した成長するための機会を得にくい。
- エ 人や物事との予期しない出会いを楽しめない。

空欄(Ⅴ)

- ア 余分な動きが多く要領が悪くなってしまう。
- イ 展開によつては予期しない対応を迫られる。
- ウ 期限を明確に求める仕事には向いていない。
- エ 結果を軽視してしまい成果が得られない。

(3) 【資料1】の空欄(Ⅲ)の内容として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 街並みや目に入る風景を楽しみながら徒歩で行く旅。
- イ 体力をつけるためにわざと遠回りをして行く自転車の旅。
- ウ ガイドブックのモデルコースのとおりに行くタクシーの旅。
- エ 目的地に向かって気ままに途中下車をしながら電車で行く旅。

(4) 【資料2】の中で、筆者の主張を誤って解釈している生徒を選び、A～Dの記号で答えなさい。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。「」内の表現は、直前の語の意味を表します。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

朔と新(高校一年生)は三歳違いの兄弟である。「昨年の年末、父親の故郷に行く日をめぐって新は母親の加子に対してつい感情的になり、衝突した。兄の朔が間に入り、両親とは別に二人だけで大晦日に高速バスに乗ることになったが、そのバスで事故に遭ってしまう。この事故により朔は両目を失明してしまい、盲学校の寮に入った。一方、新は長距離走者として注目を浴びていたが、陸上をやめてしまった。そんな新に対し、一年ぶりに自宅に戻った朔は、ブラインド(視覚障がい者の)マラソンの伴走者を依頼する。新は抵抗するが、事故に遭ったのは自分のせいだという気持ちもあり、伴走者を引き受け、二人は練習を始める。母親は兄弟でブラインドマラソンに挑戦することを知らなかった。

「新、開けるよ」

ドアを叩く音と同時に、朔が顔をのぞかせた。

「先に風呂入れよ」

いつもと変わらない調子で言う朔に、新はベッドに横になったまま「あとでいい」と答えて天井を見た。

「ならオレ先に入るから」

朔がドアを閉めかけると、「あのさ」と新はからだを起こした。

「母さんなんだって？」

朔は半分閉めかけていたドアを開けた。

「どうせブラインドマラソンのこと反対とか言ったんだろ」

「まあそんなとこ。でもわかったって。オレもちゃんと話しておけばよかったんだけど」

「べつに親に許可もらうようなことじゃないじゃん」

「そりゃそうだ」と、朔が苦笑してドアを閉めると、新はまたベッドの上に横になった。

朔がブラインドマラソンをやりたいと言ったときから、母親が反対することは新にはわかっていて。伴走者が自分となればなおさらだ。

母親とはもともとそりが合わない。中学に上がる少し前頃から、小さなことでよく母親と衝突した。そのたびに間を取り持つのが、朔だった。まわりの大人たちは、反抗期などという聞こえのいいことばでやり過ごしていたけれど、そうでないことは、新も加子もうすうす気づいていた。要は、相性の問題だ。

(5) 【資料2】の傍線部④「他者から――感じる」・⑤「他者と――変化する」というような関係を、本文中では何と表現していますか。それぞれ二字で答えなさい。

(6) 【資料2】の傍線部③「さまざまに異なる傾向」は、「() 性」と言い換えられます。空欄に入る適切な漢字二字を答えなさい。

問7 傍線部⑥「道」は、「道をゆくついで」を意味する語です。空欄に入る適切な表現をひらがな三字で答えなさい。

問8 次のア～オは、本文の特徴について述べたものです。説明としてふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 読者に問いかけるような親しみやすい文体で書かれている。
- イ 結論を先に述べ、そのあとで具体例を挙げて論を補強している。
- ウ 比喩を効果的に用いて内容を身近にとらえさせる工夫をしている。
- エ 二つの考え方を対比させながら論点を分かりやすく整理している。
- オ 先行研究を紹介することで、自分の主張に説得力をもたせている。

あのときもそうだった。

母親の言いかたに、つかつとなつて。

ただそれだけ。それだけのことだったのに。

新はぎゅつと目をつぶった。

〈中略〉

玄関のドアを開けると、いつも靴箱の横に立ってかけてある白杖がなかった。

朔、出かけてんのか……。

思わずほっとしている自分に気づいて、新は①かぶりを振った。

リビングには顔を出さずそのまま二階へ上がり、なんとなしに朔の部屋を開けた。いつも通り部屋の中はすっきりと整頓されている。

もともと朔は几帳面で、男の部屋にしては片付いているほうだったけれど、四月に帰ってきてからは以前にも増して整っている。ベッドは掛布団がきれいにかかっているし、机の上にはスマホの充電器、イヤフォン、ラジオが定位置に置かれ、パイプハンガーには、左側に白い服がさがてあり、右へ行くにつれて色の濃い服が並ぶように吊るしてある。

「なにをしてるの!？」

尖った声に新はびっくりとした。振り返ると、階段を上がりきったところに加子が立っていた。手にたたんだのである洗濯物を持っている。

「べつに」とだけ言って、新が隣の自室のドアを開けると、加子は洗濯物を持ったまま入ってきた。

「なに? なんかう」

新はカバンを放り投げると、制服のままベッドに横になってスマホを手にした。

「ただいまくらい言ったらどうなの」

「ただいま」

加子は長く息をついて、カーテンを開けた。

「洗濯物、ここに置いておくから」

そう言って、雑誌やらペットボトルが乱雑にのっている机の上に洗濯物を置くと、ちらと振り返った。

「学校、どうなの?」

新はスクロールしていた指を止めて、スマホから目を動かした。

母親が学校のことを聞いてくるのは、いつ以来だろう。

「どうって」

「あの、ほら、もうすぐ期末テストなんじゃないの?」

ああ、うんと頷いてスマホに視線を戻した。

「じゃあ、そろそろ準備しないとね」

「……………」

「クラスの友だちは」

スマホをベッドに下ろして、新はからだを起こした。

「さつきからなに!?」

「なにつて」

② 加子の視線が **A** のを見て、新は鼻を **B**。

「無理して母親ぶったこと言わなくていいから」

「どういう意味よ」

「そういう意味だよ。べつに興味なんてないだろ」

「勝手に決めつけないで。お母さんはずっと新のことを心配して」

新はふっと笑った。

「それ、マジで言ってるの?」

「あ、あたりまえじゃない」

加子の表情がこわばっていることに気がついて、新は高揚した。

「へー」

「子どものことが気にならない母親なんていないわよ」

「いんだろ、そのへんにうじゃうじゃ。つかさ、ショージキあんたはないだろ、オレに関心」

「そんなことあるわけないでしょ! 誰がそんな」

「見てりゃわかるつて、誰でも。父さんだって朔だった。あ、朔は見えないか」

③ そう言つてにやりとした瞬間、新の頬を加子が打った。加子の **a** 二重の大きな瞳

が新を見下ろしている。怒り、とは違う。憎しみとも違う。蔑むような **④** 無機質な

視線だった。

加子はなにも言わず、そのまま部屋を出ていった。

叩かれた頬に手を当てる。熱をもった頬がずくずくと疼く。そのまま新は指先に

力を入れた。

〈中略 盲学校時代の陸上部のコーチである境野の勤めもあり、朔と新は十二月のマラソン大会

に出場することになる。〉

「みんな大会の参加者かな」

たぶん、と新は答えて周囲をぐるりと見た。

「ふたり組で歩いてる人が多いよ。付き添いつていうか、ウエア着てるから、たぶん

伴走者。でもこうして見ると、伴走やってる人つてけっこういるんだな」

「でも足りてない。大会でも初対面の伴走者と走る人もいるつて。……新にはオレ

感謝してる」

「なんだよいきなり、気持ちわりー」

そうか? と朔は眉を動かした。

「毎日練習に付き合ってくれる伴走者なんて、そうそういないよ」

「だからオレだったんだろ」

「へ?」

「最初にそう言つて口説いたんじゃない。オレじゃなくてもほかにいるだろつて言つ

たら、毎日練習付き合ってくれるやつがいるのだった」

「そんなこと言つたつて」

おい、と呆れたように新が笑った。

たしかにあのとき、そんなことを言った。いまになってみると、それはもっとも

な理由だったような気もするし、誰が聞いても不自然なことではないと思う。だけ

ど……、朔はそつと息をついた。

最初の頃は、無理をして仕方なく練習に付き合っていた新が、夏頃から変わった。

大会への参加を申し込んでからは、練習メニューをクラスメイトの藤崎に頼んで、

陸上部の先輩や顧問に見てもらい、アドバイスをもらうようになった。休みの日には

代々木公園や、トラックでの練習ができるようにと競技場へ行くことも増えた。

そうやって新が熱心になるほどに、朔は自分の中にある小さなしこりが疼いてい

くのを感じていた。

「でも、オレ気づいてたよ」

新のことは、朔はぎくりとした。

「いまはそれだけじゃないつてわかってるけど、朔がブラインドマラソンを始めた

のつて、オレのためでしょ」

朔はきゅつと唇を結んだ。

「オレが陸上やめたの知つて、もう一度走らせようとして」

「新、オレは」

そう言いかけたとき、「境野さんだ」と、新が手をあげて足を速めた。

いつもより短めの三キロのランニングと軽いストレッチを終えて家に帰ると、甘い匂いがした。リビングへ行くと「お帰り」と、加子がキッチンから顔を出した。

「朝食できるから、ふたりとも早く手を洗つてらっしゃい」

b 小豆煮てるの?」

朔が言う、加子は木べらを動かした。

「そうよ。大会とか試合の前は、お汁粉がいいんでしょ」

「そういえば母さん、新が中学んときよく作つてたよね」

朔が懐かしそうに言う、加子は火を弱めた。

「辻井先生が言つたのよ」

辻井は、新の中一のときの担任だ。陸上部の顧問でもあった。

「お餅の糖質は吸収に時間がかかるから腹持ちがいいつて。お汁粉にすると糖質補

給にもなるから、記録会の日の朝食におすすめだつて、保護者会の人にね」

驚いたように顔を向けた新の視線と、加子の視線が重なった。

「そういう理由でもなかったら、朝からお汁粉なんて作らないわよ」

ほそりと言う加子に、**⑤** 「そっか」と新は口の中でつぶやいた。

「ほら、お餅もう焼けるから早くね」

加子にせかされるように、洗面所へ追い立てられた。

「今日の大会のこと、母さんに話してたんだ」

水道のコックをひねる朔の背中に新が言った。

「べつに隠すようなことじゃないだろ」

「そりゃそうだけど。梓ちゃん「朔の恋人」は? 来るんだろ」

「今日は無理だな」

「なんで!」

朔がタオルで顔を拭つて場所をかわると、新は鏡越しに朔を見た。

「いまお父さんがシンガポールから帰つてきてるんだよ。で、今日の昼の便で向こ

うに戻るから、その見送り」

「なにそのタイミング。でも梓ちゃんのことだから、来んじゃね?」

「いや、無理しなくていいつて、昨日電話でも話したから」

ふーん、とつぶやくと、「早くね」とキッチンから、加子の声が聞こえた。

千駄ヶ谷の駅で降りると、ばんばん、しゃあしゃあ朔には聞きなれた白杖をつ

く音がいくつも響いていた。

〈中略〉

「あと二段、はい、階段終わり」

階段をのぼりきるとスタンドからの強い風にあおられた。朔は首をすくめ、新は

上空に舞い上がった白いビニール袋を一度目で追つてから、目の前に広がるスタン

ドを見渡した。

「でかいな」

「ん?」

「いや、スタンドのこと。人気がないスタンドつて、なんかグラウンドより迫力あ

るつていうか」

以前同じようなことを誰かが言っていた、と考えると、ああそうか、と朔は苦笑した。

母さんだ。

ふたりがまだ幼い頃、家族四人で野球を観に行つた。そのとき、加子は野球のゲー

ムではなくスタンドの広さにばかり驚いて、修二「朔と新の父」をがっかりさせてい

た。

新と母さん、案外 **C** のかもしれない――。

「なに笑つてんだよ」

新が拗ねたような口調で言う、朔はかぶりを振つた。

「ちよつと思ひ出し笑い」

〈中略〉

いつの間にか開会式は終わつて、会場には軽快な音楽が流れている。なんとなく祭りのような華やいだ空気を感しながら朔は呼吸を整えた。

「そろそろ並んでおこうか」

新に促されてスタートゲートへ足を向けた。

「あ、境野さんたちだ。ずいぶん前のほうにいる」新が踵をあげた。

「秋田さんは、早めに準備しておきたいタイプなんだろな」

「そういえば、待ち合わせも時間よりずいぶん早くに来てたし」

「アップを始めるのも早かった」

朔はそう言つて、ふっと笑みをこぼした。

「境野さんつて、そういうところをちゃんと押さえてくんだよ」

「……な、朔は境野さんが目指してるやつって聞いたことある?」

「ん？」

「伴走者としてやってやつ」

いや、とかぶりを振ると、新は口角をあげた。

「伴走したランナーが、また次も走りたいと思えるレースをすること、だって」

「ああ、うん」

「目標タイムで走ることでも、順位でも、完走することでもない」

「境野さんらしいね。でもそっだよな、走る目的も、理由も、ひとりひとり違う」

「そう言った朔の横顔を見て、新はにっと笑った。」

「でもみんな、ゴールを目指してる。そこは一緒だよ」
どくつ。

朔の内側が鈍く音を立てた。

……ゴール。

「朔？」

朔の腕に新は肘を当てた。

「どうした？ 腹でも痛い？ もしかして緊張してきたとか？」

ふたりの横を、スタートゲートに向かうランナーたちが追い越していく。

……ゴール。

朔は薄く唇を開いた。

オレは、どのゴールを目指しているんだろう。目指してきたのだろう。

ゴールが見えない。いや、見えるわけがないのだと⑥朔は唇を噛んだ。

そんなことは、とくにわかっていた。だって、最初から間違った方向へ向かって駆け出していたんだから。そのことに気づきながら、ずっと気づかないふりをしてきた。自分の内にあるものを、きれいなことばでコーティングして、正当化した。自分が傷つかないよう、汚れないよう、気づかないふりをしているうちに、それは都合よく自分の意識から消えていった。

朔は喉に手を当てて、息を吸った。喉の奥が小さく震える。

だけど、このまま気づかないふりをして、新を縛って、その先になにがあるんだろう。

あるのは、たぶん、きつと、後悔だ。

「ごめん」

「え、なに？」

朔は浅く息をした。

「いつか新、言っただろ、オレのこと偽善者だって」

オレが視力を失った代わりに、新は陸上をやめた――。

そういうことを考えるやつだとわかっていた。だけどそれは、裏を返せば単に楽になろうとしているだけのことではないのか？ 大切なものを手放し、失うことで、同じ痛みを負ったつもりになっている。

そんな弟を、あのととき激しく嫌悪した。

新を走らせる。走らせて、走ることへの渴望を煽ってやりたい。

失うことの、奪われることの苦しさはそんなものではない。それを味わわせない――。

だけど、わかっていなかったのはオレだ。

オレは、新の苦しみをわかっていなかった。わかるうとしなかった。

「おしまいにする」

「はっ？」

「もう新とは走らない」

「なに言ってるの？」

「……勝手なこと言ってるのはわかってる。けど、ごめん。これ以上、自分に幻滅したくない」

新は朔が手にしているロープを握った。

「きつかけなんて、どうでもいいじゃん。神様じゃないんだ、人間なんだからいろいろ思うだろ。オレが朔なら、どうなったかわかんないよ。まわりに当たり散らして、壊して、傷つけて、自分の中にこもって、なにもできなかったんじゃないかって思う。」⑦朔が思ったことはあたりまえのことだよ

一気に言うと、新は大きく息をついた。

「それに、朔、それずっと続かなかっただろ」

朔の顔がびくりと動いた。

「わかるよ、毎日一緒に走ってきたんだから。伴走頼まれたとき、オレ、マジでいやだった。でもいまはよかったと思ってる。朔が言ってくれなかったら、オレはいまだってきつと、朔からも走ることからも逃げてたと思う」

「だからそれは」

ううん、と新は首を振った。

「伴走引き受けてからも、ずっと朔のために走ってるんだって自分に言い訳して、ごまかしてた。それで納得しようとした。でも、たぶん違った。伴走者としては間違ってるし、オレは失格かもしれないけど、やっぱりオレは、オレのために走ってた。朔と走るとは朔のためじゃなくてオレのためだった」

「はっ？」

「あれ正しいよ。オレ、新が陸上をやめたこと知ったとき、腹が立った」

どうしてそんなに腹を立てたのか、あのとときは朔にもわからなかった。考えようともしなかった。ただ、無性に、猛烈に腹が立った。

「オレがブラインド馬拉ソンを始めたのは、おまえを走らせようと思ったからだよ」

「そんなことわかってたよ。朔はオレのために」

「違う」ことを断ち、もう一度「違う」と朔はくり返した。

「そう思っただけ。ただの欺瞞（あざむき）だ」

新の目がくつと見開いた。

「オレは、新が思ってるようないい兄貴でもないし、人のことを思いやったりできる人間でもない。嫉妬も後悔もするし、恨んだりもする。新のことだって」

「いいよ！ いいよ、そんなこと言わなくて。ていうかなんて言うんだよ、しかもいまってなんだよ」

「いまだから」

いまじゃなかったらオレは話せていない。

また気づかないふりをしよう。逃げてしよう――。

「意味わかんねんだけど」

新の声がかすれた。

「おまえに伴走を頼んだのは、オレのそばにいて、オレと一緒に走ることで、新が苦しむことがわかっていたからだ」

新を傷つけてやりたかった。失明したのは新のせいじゃない。事故だった。ただ運が悪かっただけだ。頭ではわかっていたつもりだった。それでも、病院のベッドの上でも家を離れてからも、もしもと同じことが頭をよぎった。

新のせいにするなんてどうかしている。そんなことを思うなんて、頭がおかしくなったんじゃないかと自分を疑った。でも、頭ではわかっているはずなのに、気持ちがついていかなかった。どうしても、もしもと考え、それをあわててかき消して、また同じことを繰り返した。

時間とともに、身のまわりのことがひとつひとつできるようになり、視力に頼らず暮らしていくすべを覚えていった。もしも、ということばが頭をもたげることもしんどくなかった。これなら家に戻っても、家族の荷物にならず生活できる。新と会っても感情が揺れることはない。そう思っただけなのに、梓から新が陸上をやめたことを聞いたとき、時計の針が逆回転した。

あのととき、新がやめた理由を梓に問いながら、朔には察しがついていた。

新はロープを握り直した。走ることは、孤独だ。どんなに苦しくても、辛くても、誰かに助けてもらえるものではない。走れなくなったらその場に立ち止まり、倒れ込むだけだ。それはブラインド馬拉ソンと同じだ。ふたりで走っていても、伴走者が支えるわけじゃない。手を引くわけでも、背中を押すわけでも、代わりに走るわけでもない。

ふたりで走っていても、それは変わらない。

走るとはやっぱり孤独だ。

孤独で、自由だ。

「行こう」

「オレは」

「最後ならそれでもいいよ。だけど、ここで棄権するとか言うなよな」

新は朔の腕をつかんで、スタートゲートへ足を向けた。

にぎやかな音楽が響いている。曇天の下、ゲート前は数百人のランナーたちがひしめき、からだを動かしたり談笑したりしながらスタートを待っている。

朔の背中に手を当ててインコース側に立つと、何列か前に内村の姿が見えた。その背中を新はじつと見た。

あの人も一度は走ることをやめた人だ。あきらめて、自分で断ち切ったのに、それでもまた走っている。オレも同じだ。

「オレ、やっぱり走ることが好きだ」

黙ったまま朔は小さく頷いた。

頬に日差しがあたり、朔は空を見上げた。

「前に朔、言っただろ、『新はいろんなものを見せてくれる』って。あれ嬉しかった。オレ、ずっと朔の役に立ちたかったから」

新のことばを聞きながら、朔はそっと目を閉じた。

白く靄のかかったような薄曇りの空から、一筋光がこぼれる。

「だけど、逆だよ」

朔はびくりと肩を揺らした。

「オレが見えなくなってたものを、朔が見せてくれた」

驚いたように朔は新のほうに顔を向けた。

「オレ、走りたい。走るよ、逃げないで走る。で、強くなる」

(いとうみく 著『朔と新』より)

問1 太線部 a 「二重」・ b 「小豆」・ c 「無性」・ d 「棄権」の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

問2 傍線部①「かぶりを振った」から読み取れる新の気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 視力を失った朔に気をつかって生活しているため、朔がいらない一人きりの時間を満喫したいと願っていたところ、その思いが叶って満足している。

イ 視力を失った朔のことを気にして過ごしているため、朔が外出していることに安堵してしまったが、そう感じるのはいくつかだと思っている。

ウ 視力を失った朔がどのように生活をしているのか気になっていたため、朔の外出は部屋を盗み見る絶好の機会だと考え、決行しようと思っている。

エ 視力を失った朔と折り合いが悪く、お互い居心地の悪い思いをしているため、朔の不在をうれしく思ったが、それは意地の悪いことだと考え直している。

問3 傍線部②中の空欄 A・Bに入る語の組み合わせとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア A 止まる B かいた

イ A 揺れる B 折った

ウ A 動く B すすった

エ A 泳ぐ B 鳴らした

問4 次は、傍線部③「そう言うてにやりとした」時の新について説明したものです。空欄Ⅰ・Ⅱに入る最も適切な表現を、それぞれ後の選択肢から選び、記号で答えなさい。

もともと母親とは何かと衝突していたとはいえ、事故のあと（Ⅰ）。そのため、唐突に自分への関心を示してきた母親の態度を素直には喜べなかった。見せかけの関心にすぎないと思い反発を示した新は、（Ⅱ）態度をとっているのである。

ウ 自分は昔から母親と相性が悪くケンカが絶えなかったが、陸上の試合の時にはお汁粉を作ってくれることに愛情を感じていた。だが、それは中学時代の顧問の先生の助言に従ったただけであつたと知り、自分が勘違いしていたことにショックを受けている。

エ 自分は母親と折り合いが悪く、その上あまり気にかけてもらっていないと感じていた。だが、中学時代によくお汁粉を作ってくれていたのは他ならぬ自分のためだったと知り、母親の愛情に自分が気付かなかっただけなのだということを受け止めている。

問7 空欄Cに入る言葉として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 感性が合わない イ 似ている

ウ 空気が読めない エ 馬が合う

問8 傍線部⑥「朔は唇を噛んだ」とありますが、この時の朔の心情として当てはまるものを次から全て選び、記号で答えなさい。

ア 互いに秘密を抱えている今の自分と新とは、次も一緒に走りたいと思えるようなレースをするという目標は達成できないという失望感。

イ 新を傷つけたいと願う自分の醜い内面が知られたら、自分を信頼してくれている新に軽蔑されてしまうのではないかと恐れる気持ち。

ウ 失明は新のせいではないとわかっているものの、恨みの気持ちを消すことができない中で、弟思いをよそおっている自分への嫌悪感。

エ 今自分の本心を打ち明けたとしても、もう一度と新と走ることとはできないかもしれないという不安に押しつぶされそうな思い。

オ 陸上競技への未練に新が苦しむことを意図して走っているのでは、どんなに努力しても心は満たされないという痛切な思い。

空欄Ⅰ

ア 過度に干渉されていると思い、いら立っていた
イ 放っておかれていることに気楽さを感じていた

ウ ことあるごとに非難されることに悲しみを感じていた

エ よそよそしい態度をとられていると思い、傷ついていた

空欄Ⅱ

ア 動揺している母親を見て、感情が高ぶり挑発的な

イ うろたえている母親を見て、滑稽に思い馬鹿にするような

ウ 悲しむ母親を見て、その場の空気を和ませようと冗談めいた

エ 自分に気持ちが向いていない母親を見て、注意を引くために目立つ

問5 傍線部④「無機質な視線」の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 朔の障がいからかうような態度をとった新への高圧的な視線。

イ 自分の失言を笑いでごまかそうとする新への見下げするような視線。

ウ 朔の尊厳を傷つけるような態度をとった新に対する冷めきった視線。

エ 朔に対する責任を感じていない新に全ての関心を失ったような視線。

問6 傍線部⑤「『そっか』と新は口の中でつぶやいた」とありますが、この時の新についての説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分は昔から母親と相性が悪く、ケンカが絶えないこともあって愛情を注がれていないのだと思っていた。しかし、中学時代に好物のお汁粉を作ってくれていたことを今回のことと思い出し、母親の深い愛情に気が付いて心が満たされている。

イ 自分は母親と折り合いが悪く、兄のように愛されていないのだろうとずっと思い込んでいた。しかし、中学時代にはよく自分のためにお汁粉を作ってくれていたことを思い出し、母親に確かに愛されていたという記憶をよみがえらせている。

問9 傍線部⑦「朔が思ったこと」について、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 失明を新のせいにして傷つけてやりたいと思ったこと。

イ 内心では新を恨んでいることを隠し通そうと思ったこと。

ウ 新が陸上をやめたこと知って猛烈に腹立たしく思ったこと。

エ 新を励ましてまで走ろうとするのをやめようと思ったこと。

問10 次は、8ページの〈中略〉以降の展開について説明したものです。これを読み、後の問いに答えなさい。

マラソン大会本番のスタート直前、自分の生き方を顧みた朔は、新に伴走を頼むことについてあれこれ考えをめぐらし、（ア）を繰り返しては醜い自分の内面に向き合い、（イ）に陥っていた。しかし、「見えなくなつたものを、朔が見せてくれた」、つまり X ということを新から言われ、心情に変化が生じる。情景にたとえて言えば、「（ウ）」のようであつた心情から光が差し込んでくるような心情へと変化を見せるのである。

(1) 空欄ア・イに入る適切な四字熟語をそれぞれ答えなさい。

(2) 空欄ウに入る適切な漢字二字の語を本文中から抜き出し、答えなさい。

(3) 空欄Xに入る適切な内容を二十字以内で答えなさい。

国語

解答用紙

受験番号

得点
※

※	※	※	※	※	※

一

問 7	問 6		問 5	問 4	問 2	問 1
	(5)	(1)	ア	ア		a
	㊸					
		(2)	イ		問 3	b
		Ⅱ		イ		
	㊹					
問 8			ウ			c
		V				
	(6)		エ	ウ		d
		(3)				
		(4)		エ		

二

問 10		問 8	問 5	問 2	問 1
(3)	(1)				a
	ア				
					二
			問 6	問 3	重
					b
		問 9	問 7	問 4	小
	イ			I	豆
					c
				Ⅱ	無
					性
					d
	(2)				棄
					権

※	※	※	※	※	※